第 2012-07 号

恵みと真理のニュース

2012 年 4 月の一次　恵みと真理教会
韓国 京畿道 安養市 萬安区 安養 5 洞 458-5 / ☎82-31-443-3731 / www.gntc.net

［証］　息子の治療過程をとおして感じた神様の愛。

私は小学生のとき教会に行ったことがありました。しかし神様を受け入れることができず、そのまま教会から離れました。

1987年結婚して二人の息子を産みました。次男が2歳になったときのことでした。食事をしてお茶を飲もうと思ってキッチンでお湯を沸かしていました。リビングでテレビを見ていた旦那がおもしろい番組が始まったからと、私を呼びました。私は急いでリビングに行きました。その後でした。子どもの泣き声がキッチンから聞こえてきました。とても驚いてキッチンに行ったら、沸かしていたお湯が次男の腕にこぼれていました。幸いなことに、顔には火傷をしませんでしたが、腕はとても赤くなり、はれていました。急いで車に子どもを乗せて病院へ行きました。しかし、日曜日だったので閉まっているところが多く、薬屋に行って緊急装置をしました。

当時、家は恵みと真理教会のすぐ裏にある建物の3階でした。1階には教会の首席区域長が住んでいましたが、たまにうちに来て福音を伝えてくれました。しかし、私は全然興味がなく聞きませんでした。

次男が事故にあった後、その首席区域長が思い出して次男の話をしました。それで首席区域長は教区長と一緒にうちを訪問しました。次男のために祈り、完治のために取り成し祈りをしてくれました。その後、私は恵みと真理教会へ通い始めました。そして、息子の火傷した腕は神様の恵みできれいに治りました。私はその後から雨が降っても、雪が降っても一生懸命に教会に行きました。礼拝に参加して当会長牧師先生の御言葉で恵まれ、信仰も成長し聖霊のバプテスマを受けることができました。区域長になってからは喜びを持って神様のために働きました。

いつのまにか、次男が大きくなって軍隊に入るようになりました。頑張って信仰生活をして来た息子だったので軍隊に行っても神様が守って下さる確信もっていたので心配しませんでした。

基礎訓練を終えて各軍域へ配置されるごろになって息子から連絡がきました。手首が痛いということでした。私たち夫婦はすぐ治ると思いましたが、時間が経つほど痛みが激しいということでした。軍の病院に行きましたが、異常はないということだったので、軍でも治療を受けることができるように神様に祈るしかありませんでした。

しかし、ある日私たち夫婦は軍の病院へ行くことになりました。それは、私たちが同席したところで息子のMRI撮影をして病状を確認するためでした。しかし、その結果、炎症でした。薬をもらってギブスをしましたが、そのまま軍隊へ復帰すると休むことができないと思いました。それで治療のため家に帰ることを担当の人にお願いしました。幸いなことに息子は病院に入院して治療を受けることができました。注射をして薬もちゃんと飲みましたが、痛みが止まりませんでした。それで大きい病院へ運ばれました。しかし、息子の病名は明らかになりませんでした。治療を受けても症状の変わりがみえませんでした。とても心配だったのでソウルの大きな病院へ行くために予約しましたが、3ヶ月も待たないといけない状況でした。私は問題があったときいつも妹と一緒に祈っていました。それで今回も次男のために一緒に断食祈りを始めました。“だからあなたがたに言うのです。祈って求めるものは何でも、すでに受けたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります。”（マタイ11:24）この御言葉に頼り切なく祈りました。神様が私たちの祈りを聞いて下さり、驚くことを見せ始めました。ある水曜日、聖歌隊の練習を終えて家に帰ってきました。パソコンのメールを確認していたら、予約していたソウルの病院の担当医者からのメールでした。診察が可能な日を教えて下さいということでした。軍隊にいる息子を3か月も待たせることができないと思い、担当医に直接送ったメールに対する返事でした。‘神様はこのような方法をとおして祈りに答えてくださるんだな。’とても感謝でした。

病院からの連絡を待っていた息子を連れてソウルに行きました。一日で血液検査、CT撮影、MRIなどすべての検査をして手術日も決めました。大きい病院だから何日もかかるだろうと思っていましたが、3時間ですべての検査が終わるように神様が用意して下さったのです。医者からは、少しでも遅れたらとても大きな病気になったかも知れない、ということを聞いて、すべてことを成し遂げられて御守って下さった神様に感謝しました。息子は無事に手術をして15日間病院で治療を受けました。その後再び軍隊へ復帰して軍隊を無事に終えます。

“苦しみにあったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。”（詩編119:71）この御言葉のように生きておられる神様の豊かな愛と恵みを苦難をとおして大きく経験することができました。神様の子どもをひとみのように御守って下さる神様に感謝します。私たちを選んで下さって救って下さり、いつも愛して下さる方。毎瞬間御守って下さる神様に感謝と賛美と栄光を捧げます。

［信仰コラム］　泣き歯ぎしりするようになる人たち

“しかし、御国の子らは外の暗やみに放り出され、そこで泣いて歯ぎしりするのです。”（マタイの福音書8:12）

イエス様は“悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。”という御言葉を語告げ、公的活動を始めました。聖書には、イエス様が天国の福音を伝えたと、書いてあります。しかし聖書をよく読んでみると、イエス様は地獄の刑罰に関する話もたくさんしていることがわかります。イエス様が地獄の実状を話すことによって、地獄に行かないようにするため警戒していることも天国の福音を伝える中で、避けられないとても大事であることがわかります。イエス様は、地獄は実在していてとても激しい苦痛の場であると、おっしゃています。マタイの福音書には地獄に入った人が“泣いて歯ぎしりするのです。”という、イエス様の警戒と警告が六回も記録されています。その六回の警告はどんな人に向けておっしゃていたのか、調べます。

第一、 血通や家門、行為に頼りながら、救われようとする人は地獄に落ちい、そこで歯ぎしりするというのです。血通と家門が天国に入るようにしてくれるわけがありません。自分でイエスキリストを信じない以上、誰もこれを代わりにやってくれる人はいません。

第二、えせ宗教や異端の教えで他人の信仰を壊れると地獄に落ちいてしまい、そこで泣き歯ぎしりするということです。イエス様が毒麦と例えた不信者とつまづく者と異端は結局地獄に落ちてしまいます。

第三、神様の国で無益で、無価値な者は地獄に落ちてしまい、そこで泣き歯ぎしりするということです。価値のあるものと価値のないものの判断基準はイエスキリストに対する信仰です。イエス様を信じる者は神様の御国の中でとても価値のある者であり、儀人なのです。しかし、イエス様を信じない者は神様の御国でどうも使えない悪人であり、終国には泣き歯ぎしりし地地獄に落ちてしまいます。

第四、イエスキリストという儀の服を着ていないと地獄に落ちてしまい、そこで泣き歯ぎしりするということです。天国まつりに招待された人は神様が用意した洋服を着るべきです。それは、イエスキリストを信じる者に与えて下さる神様の義であります。世の宗教、自分の善行など人が作った洋服を着て神様の前に行くことはできません。

第五、イエス様の再臨について勝手に考えて話すことによって結局、信仰を失い地獄に落ち、そこで泣き歯ぎしりするということです。イエス様が再臨するその日をいつも待ち望みながら生きていくと、いついらっしゃても喜んで迎えることができます。しかし、主の再臨を待ち望んでいないと怠けて、だるい生活をする、刑罰を受ける者になります。

第六、信仰をイエスキリストを信じ、仕えるために使わないと地獄に落ち、そこで泣き歯ぎしりするようになるということです。神様は誰にも信仰という賜物を与えて下さいました。しかし、その賜物を活用せず、土に埋めてしまった者のように自分が持っている信仰をイエスキリストを信じ、仕えるために全然活用しない者は無益な者とされ、地獄に落ち、そこで泣き歯ぎしりするようになります。

地獄に落ち、泣き歯ぎしりする者にならない道は、たっだ一つです。それはイエスキリストを信じて仕えることです。みなさんの中には地獄に落ち、泣きながら歯ぎしりする人が無しにみんなが天国の祝福を味わうようになりますようにお願い致します。

「チョヨンモク牧師先生の信仰コラム‘緑の牧場、清い川’本の語り中」

エリシャとヨシャファトの模範と教訓

恵みと真理教会 **チョヨンモク** 牧師

イスラエルはソロモン王の息子レハブアム王の時に国がふたつに分裂される非運に処しました。そして北王国イスラエルと南王国ユダは時には敵対関係で同族殺し合う悲劇を生んで、時には同盟関係を結んで友好的な協力をするようになりました。
今日の聖書本文である列王記下３章にはイスラエルの治者ヨホラム王とユダの治者ヨシャファト王が同盟してモアブを攻めた事件が記録されています。
この戦争の事情はこのようです。モアブはイスラエルの属国になって朝貢を上げていました。 ところがヨホラム王の時には裏切って朝貢を上げなかったのです。
それで、ヨホラム王は軍隊を集めてモアブを攻めようと立ちました。ヨホラム王はユダ王ヨシャファトに協力してくれと要請して、ヨシャファト王は承諾しました。
ヨホラム王はヨシャファト王にどの道に進軍した方が良いのか問いたら、ヨシャファト王はエドム荒野の道を教えました。
イスラエルとユダとエドムが連合軍を導いてエドム広野に進軍しました。彼らが行進してから七日になると水の不足で極甚な困境に処しました。ヨホラム王は落胆して「ああ、主はこの三人の王をモアブの手に渡すために呼び集めたのか」と嘆息しました。三人の王を集めたのは自分なのに困難に処すると神を恨みました。ヨシャファトが「ここには我々が主の御旨を尋ねることのできる主の預言者はいないのですか。」と尋ねると、イスラエルの王の家臣の一人が、「ここには、エリヤの手に水を注いでいたヨシャファトの子エリシャがいます」と答えました。三人の王は予言者エリシャに会うため直接下って行きました。エリシャは自分を尋ねて来たイスラエル王ヨシャファトを冷たく迎ました。
ヨホラム王はエリシャ予言者の冷たい態度を謙遜に受け入れました。そしてこの切迫した危機をどうすれば良いかエリシャの教えるを求めました。
エリシャは言った。**『わたしの仕えている万軍の主は生きておられる.わたしは,ユダの王ヨシャファトに敬意を抱いていなければ,あなたには目もくれず,まして会いもしなかった』**
ユダ王ヨシャファトは真心で神を仕えたから予言者の尊敬を受けました。エリシャは楽器を演奏者を呼んで演奏させました。あの時、神様がエリシャを感動させたのでエリシャは王たちに予言しました。王たちはエリシャの予言を信じてその指示どおりしました。その結果、イスラエル連合軍は大きい勝利を勝ち得ました。今からこの事件の記録から神霊な教訓を受けようと思います。
先は、エリシャが自分を尋ねて来た王たちに見せてくれた態度から私たちが得られる教訓があります。
エリシャ予言者に助けを求めるために尋ねて来た人は 三つの国 王たちでした。誰でもこんな状況になればすごく栄え栄えしく思うでしょう。そして王たちを丁寧で手厚く迎えるでしょう。
ところでエリシャは彼を尋ねて来たイスラエル王ヨホラムを向けてとても冷淡に言いました。
ヨホラム王の父親はアハブで母親はイゼベルです。
その影響を受けた王はバアル崇拝をして、全民に拡散されました。
ヨホラムは彼の父親アハブのようにバアル神を積極的に崇拝しなかったが、またエホバ神を完全に仕えもしなかったです。
だからエリシャ予言者は困境に処して尋ねて来たヨホラム王に断固として冷情な態度を取ったのです。
このようなエリシャの態度で私たちの得た教訓があります.〈その人がどんな地位にあるかと言うより、その人がどんな信仰を持っているかを人の判断基準にしなさい〉と〈神様を敬い畏れる者を大事に思いなさい〉と言う教訓です。
エリシャは楽器を演奏する者を呼んで、先に神へ賛美を捧げました。すると神様がエリシャを感動させて王たちに予言を言いました。
賛美は神様を喜ばします。
エリシャは予言する力が自分にあるのではなく、賛美を受ける神様から与えられることを王たちに現わしたのです.これがエリシャが行動で見せてくれた教訓です。
次は、王たちの行動を通じて私たちが得る教訓があります。
イスラエル連合軍がエドム広野で水がなくて死の危機に直面するようになるとヨホラム王は 神様を恨みました。ところが、ヨシャファト王は 困境に処した時、まず神様のお話を 捜しました。
私たちが困境に処するとかどんな重要な決断を出さなければならない時、神様がどのように導いてくれるかを調べようとする努力が必要です。
神のお話は私たちに知恵と力と望みと慰労を与えます。
現在は予言者を尋ねる必要がないです。神様が予言者と使徒たちを通じて啓示なさったお話を記録するようにして私たちに与えてくださった聖書があります。聖書は完成された啓示の本です。私たちが聞こうとする言葉が聖書の中に書かれてあります。
礼拝に参加して説教者が神様の言葉を詳らかに解いて教えるお話をよく聞いてください。
エリシャ予言者が王たちに伝えた神様のお話しです。彼は言った。「主はこう言われる。**『この涸れ谷に次々と堀を造りなさい。』**
主がこう言われるからである**『風もなく,雨もないのに,この涸れ谷に水が溢れ,あなたたちは家畜や荷役の動物と共にそれを飲む。』**
これは主の目には小さいことである.主はモアブをあなたたちの手にお渡しになる.
あなたたちはすべての砦の町、すべてのえり抜きの町を打ち破り、すべての有用な木を倒し、すべての泉をふさぎ、すべての優れた耕地を石だらけの荒れ地とする。」（列王記下３；１６−１９） 王たちはエリシャの予言を信じてそのとおり行いました。
すると、翌日の朝、彼らが掘った淀みに水がいっぱいになる奇跡が起きました。
その水は死の直前にいた軍事たちと獣を生かしました。
一方、モアブ王はイスラエル連合軍の浸政消息を聞いてよろいを着る者位を呼び集め南国境地域へ配置されました。モアブの人々はイスラエル連合軍を気軽く思いました。モアブ人々が連合軍が止まっている谷間を眺めたらその谷間に血が一杯でした。
彼らは,「これは血だ.王たちは自分たちどうしで争い、討ち合ったにちがいない。モアブよ、今こそ奪うときだ」と言い, 谷間に向けて走っていきました。
彼らが谷間の水を血で誤解したことを悟った時はもう時が遅かったです。
万般の態勢を取り揃えていたイスラエル連合軍が一遍に攻撃を敢行したらモアブ人々は戦意を喪失してあたふたと城へ逃げました。イスラエル連合軍は大きい勝利をおさめるようになりました。
これは王たちがエリシャ予言者の予言を全面的に信じて順従した結果でした。
このように キリスト人の信仰は神の言葉に対する信仰と従順で証になる信仰です。
終りにもう一つよく見ることがあります。
エリシャは神の感動を受けてお話を宣布して 〈この谷に淀みをたくさん掘りなさい〉と命じました。
このお話は現在の私たちに象徴的な意味を加えてくれます。私たちがほらなければならない淀みは何ですか。
神様の仕事に身と才能と時間と物質を捧げて献身する献身の淀みです。
すべての願いを神様に申し上げる祈りの淀みです。
神様を頼り信じて話す信仰の話しと言う淀みです。
イエスが異邦地域のティルスの地方のある家に入りました。その時、汚れた霊に取りつかれた幼い娘を持つ女がイエスに来てその足もとにひれ伏して切に求めました。
イエスは言われました。「まず、子供たちに十分食べさせなければならない。子供たちのパンを取って、小犬にやってはいけない。」
ところが、女は答えて言った。「主よ、しかし、食卓の下の小犬も、子供のパン屑はいただきます。」
そこで、イエスは言われた。「それほど言うなら、よろしい。家に帰りなさい。悪霊はあなたの娘からもう出てしまった。」
女が家に帰ってみると、その子は床の上に寝ており、悪霊は出てしまっていました.。（マルコ７；２４−３０）その女は挫折を感じる状況に処しました。しかし、信仰の言葉だけ続けました。その結果、信仰で掘った 淀みに神様の治療の力が流れはいりました。井戸を掘ることは私たちがすべきことで、水をいっぱい 満たすことは神様がなさる仕事です。私たちがする義務を果たせば神様は必ず神様の責任を 果たして下さいます。
この時間、本文に記録された歴史的記録が私たちに聞かせる神霊な教訓を 顧みました。
教訓 の通り実践して神様の力が皆さんの暮らしの中でたくさん体験出来て 証で告白できるのを祝福 して祈ります。